

う っ ひろ きょう  
 承 継 ぎ 弘 め て 今日 より は  
 た だ くらし  
 正 し き 慧 命 う ち た て ん



平成25年 9月25日

第 38 号

発行 梅花流師範・詠範の会  
 会長 本間 雅 憲  
 題字 初代会長・故加藤信三師  
 編集者 (広報部) 亀谷 隆道

梅花流師範・詠範の会事務局  
 大仙市協和 太寧寺 伊藤道人  
 電話 (0188-96-2029)

# ごあいさつ



秋田県梅花流師範・詠範の会 会長 本間 雅 憲

この夏は全国各地で災害が続き、甚大な被害をもたらしました。県内でも大雨による被害がありました。被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。

この度、岩館先生が辞任され、秋田県師範・詠範の会会長に任せられました。浅学非才の自分が、岩館先生をはじめ歴代の会長様の後任を務めることは大変恐れ多いことであり、身の引き締まる思いです。しかし、努力を重ね何とか任を全うしたい所存であります。何卒ご指導ご協力下さいますようお願い申し上げます。

七月六日、県北二ツ井での大会へ行っていました。皆様の登壇の様子を拝見し、明るく元気な奉詠に感動いたしました。また、地元の皆様には二ツ井音頭などの踊りで会場を盛り上げて頂き、ありがとうございました。

すべての登壇について講評させていただきました。厳しい言葉になつてしまったかもしれませんが、さらにすばらしい奉詠になるようにとの思いによるものです。何卒ご容赦いただきたく存じます。

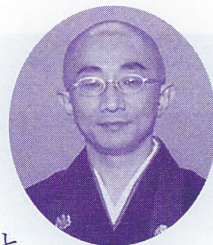
十月十八日には中央・県南大会が大森町体育館を会場に開催されます。昨年が続いての県南地区での大会です。当地域のご寺院様ご寺族様にはお世話になります。檀信徒の皆様方にお声掛けいただき、一人でも多くの方が来場されますようご尽力を賜りたくお願い申し上げます。

師範・詠範の会も全力で努めてまいります。皆様の絆があつてこそ梅花流奉詠大会です。ともに盛り上げてまいります！

# の鈴鉦、鳴り響く...

## 梅花流全国奉詠大会開催報告

梅花主事 佐藤徳祐



本年度の梅花流全国大会は、五月二十九日と三十日の二日間にわたり、宮城県利府町の「グランディ・21」において行われました。当県の登壇は三十日

で、参加者は宗務所企画のバス移動六台、現地集合の方々を合わせて四十五梅花講参加で総勢三〇〇名でした。五月二十九日に秋田を出発、宮城県秋保温泉で一泊して大会に臨みました。

今大会では、東日本大震災被災物故者三回忌法要も併修されました。震災で犠牲になられた方々を参加した全国の皆さんで供養する意義深い大会でした。大会の中で福山諦法禅師がお話くださった内容を中心にご報告させていただきます。

開会式では、「この大会が宮城県で行われる事は、被災地の皆様に復興に向けての勇氣と希望の灯火となり意義深いと思えます。梅花流は創立以来六十一周年目を迎えました。梅花流詠讃歌は信仰生活の実践そのものであります。梅花講中の皆様にも、佛教のみ教えに参じえた喜びを知るか否かに

関わる事と言えるでしょう。お一人おひとりがみ仏のみ弟子であることを自覚し、怠らざる精進下さい。梅花流のお誓いにあるように、和合を旨とし、上手に流れず、下手に屈せず、真心をもってお唱え致しましょう。

大震災の影響で参加できない人もいることでしょう。そういう方々の思いも察して努めましょう。茲に謹んで遭難者精霊と一切の命に対し、供養の誠を捧げます。また困難の最中にある人々を励ます為にも心を込めてお唱え下さい。澄んだ皆様の声と鈴鉦の音は五ヶ月空に響き、四方にも十方届くと信じます。梅花流の詠道を通じて「一仏両祖の正法をお伝え下さいますこと祈念致します。」と、ご垂示なさいました。



秋田県は十番目奉詠で、青森県宗務所の方々との合同でした。一〇〇名の代表登壇の中、五〇名の方々が壇上に登られました。奉詠曲は「道心利行御和讃」で、会場の席に残られた方々も立行作法にて自席奉詠し、参加者一同でお唱えすることができました。会場インタビューでは、県内の詠範さんより「皆さんこの日に備えて一生懸命頑張ったと思います。ここに來られて幸せを感じております。どうもありがとうございます。」と答えられました。今大会に参集した講員さんすべての気持ちだと思います。

被災物故者三回忌法要では、禅師が導師をおつとめになり、読経後「追善供養御和讃」を会場参加者一同でお唱え致しました。法要後、禅師様は「本日、この三回忌追悼法要を厳修することにあたり、ここに皆様とともに震災によりかけがえのない命を失われた多くの人々

# 被災地に鎮魂と復興

とその遺族に対し深く哀悼の意を表します。平成二十三年三月十一日に起きた東日本大震災とそれに伴う大津波は、我が国の歴史上未曾有の大災害でありました。死者行方不明者二万人にも及ぶものであり、それに加えて福島原子力発電所事故により放出された放射能の汚染のため、今も十六万人余りの人々が避難生活を余儀なくされており、被災から二年が過ぎた今も現地の人々の悲しみは深く、復興の道は遠く苦しんでおられます。震災後に訪れた被災地では、長年にわたり人々が築いてきたふるさとが痛々しく破壊され、その傷跡は未だに癒えず残されたままありました。私たちはお釈迦様・道元禅師様・瑩山禅師様の慈訓に準じて人々の心に灯火を点じ、自未得度先渡他の心を発し、被災地の人々と向き合い、伝え合い、支え合う事が大切であると思いを新たにしています。東日本大震災は大自然の驚異とそれに逆らえない人間の悲しい出来事であり、数多くの教えを残していった訓戒であったと考えます。地球



に蔵された資源が次々に採掘され、利用されています。石油・天然ガス・原子力エネルギーの素となる物質も地下に眠っていたものでありました。これらは豊かさをもたらした反面、危険をも含んでいました。この星の資源は無尽蔵ではありません。それ故に使い方が問われ、使い誤れば惨事を起こし、奪い合えば人心に混沌をきたします。この国難の時代、私たちに増上慢の非があるならば改め自然を畏敬し感謝せねばなりません。助け合い、水も空気も分かち合い、ともに生きる道を辿りたいものであります。今も尚、多くの苦難を背負う被災地に思いを寄せ、被災者一人ひとりの上に、一日も早く復興と安寧が訪れることを祈念致します。」とお言葉を残されました。禅師様は壇上より降りられ、親しく会場の私たちの側をお通りになり退堂されました。私たち

は合掌して「正法御和讃」をお唱えし、お見送り致しました。会場での秋田県参加者の座席が出口付近だったこともあり、禅師様の間近でお見送りすることができたことに感動された方も多かったです。清興は地元のさとう宗幸さんのミニコンサートが催され、懐かしい曲もあり華やかなステージで大会を盛り上げて下さいました。最後に「まごころに生きる」を合唱し、大会を終了しました。大変盛況であったと思います。退場時に地元の宮城県と福島県の参加者の皆さん、大会スタッフの方々のお見送りを頂きました。手を振って下さる姿に被災地の早期復興と皆さんの身体堅固を願う気持ちで心がいっぱいになりました。その後企画バスの参加者は松島に二泊目の宿を取りました。懇親の宴は大会に参加できたことに感謝し、互いの交流を深め、楽しい時間を過ごさせて頂きました。最終日は被災地を巡り今の様子を見学し、気仙沼では地元の方から説明をいただき、大震災当時に思いを馳せて参りました。全行程を無事に終了して戻ることができましたこと、ご参加下さいました皆様に感謝します。ありがとうございました。来年は島根での大会になります。是非ご参加下さいますようお願い申し上げます。

梅花のふるさと

詠讚歌の生まれた風景 へその十六 観世音菩薩御詠歌

# 限りない母への追慕 歌僧・日政の孝恩

## 観世音菩薩御詠歌

たのもしなあまねき法の光には  
人の心のやみものこらじ

草山和歌集  
観音信仰講話再録

『観世音菩薩御詠歌』の歌詞は、大正十四年に出版された細川梧蔭（道契）著『観音信仰講話』に収録された和歌がもとになっています。

この和歌は、江戸時代を通じて人々に親しまれていたものでした。今回はその原典の和歌集『草山和歌集』にさかのぼり、この歌の成立を学んでみましょう。

### ◇日蓮宗僧侶・日政◇

江戸時代も早い頃、元和九年（一六二三）にその人は生まれました。姓は石井。俗称は吉兵衛、俊平、また元政と名のりました。ある夜母

人の高僧がやって来て「頼もしきかな」と言うのを夢み、覚めてお腹に宿っていたのが誕生の縁と言われています。幼時から神童のほまれあり、十三歳で彦根藩主・伊井家に仕えました。

母は観音の熱心な信者でした。ある時、元政は母が大切にしていた観音の肖像を乞うのでした。その像は、かつて母が石山詣での途次に得た秘蔵のものでした。元政の求めを聞いて母は「昨夜の夢にこの観音さまが（俊（※俊平こと元政のこと）と行かん、俊と行かん）と言っておりました。不思議なこともあるものです」と語って、その像を与えました。

十九歳、京都で母とともに日蓮上人の像を拝した元政は、次の三つを生涯の誓願に掲げました。

- 一、必ず出家する
- 一、父母に孝養を尽くす
- 一、天台三大部を究める

その後二十六歳の時、日蓮宗妙顕寺の日豊上人に従い、出家を遂げ、名を日政と改めました。

天台三大部とは『法華経』の代表的な三種の解説書のことですが、出家後の日政はこれについて精力的な研鑽を果たしました。

また京都深草に（初め称心庵）瑞光寺を開き、その傍らに両親の居室を建て、孝養に尽くしました。深草の地にちなんで、この地を草山と呼び、また元政のことを草山上人とも呼んでいました。日頃は常に袈裟をかけ、戒律（仏教者の生活規律）に従い、経文を誦して過ごしました。仏教に勝れただけでなく、広く文人とも交わり、和歌や漢詩などにも深く通じました。

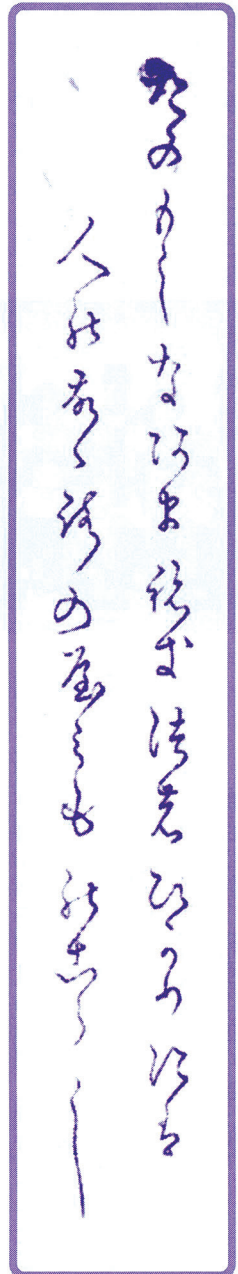
ただ生来病気がちで、寛文八年（一六六八）、四十六歳をもって、その生涯を終えました。

### ◇孝養の人◇

両親のうち、父は八十七歳で先立ち、一人残された母に対し、日政はいつそうの孝行を重ねました。母の願いによって父の遺骨を抱いて身延に参詣しました。また母一人のために『法華経』のやさしい解説書を著してもいます。仏教者の孝養の



日政上人像



やがてその母も、父と同じく八十七歳で天寿を全うしました。その折り、親交のあつた人から日政のもとに五首の和歌が送られ、これに対し日政は、次の五首をもつて返事としました。

先立たばなほいかばかり悲しきのおくるるほどはたぐひなけれど  
 いまはただ深草山にたつ雲を  
 夜半のけぶりの果てとこそ見め  
 なにごとも昨日の夢としりながら  
 思ひさまさぬ我ぞかなしき  
 いかにしていかに報いん限りなき  
 空を仰ぎて音には泣くとも  
 たのもしなあまねき法の光には  
 人の心の闇ものこらじ

一首目の歌は、次のように解釈できるでしょう。「もし私が先に死んでいたら、母の悲しみはいかばかりだったろう。母に死に後れた私の悲しさはたぐひないほど深いだけけれど」。

後に梅花流詠歌の一つとなる「慈光」は、この時の一首なのでした。第一首から第四首までは、母の死去した「悲しみ」が主題となっていますが、第五「たのもしな」の歌は、生前の母が与えてくれた大いなる養育の恩を、観世音菩薩の慈愛のように称え、一時の悲しみに沈む心から、感謝と報恩の心へと立ち直つてゆくような趣が感じられます。ここにはまた、母の忘れ形見であつた小観音像の姿を、重ね合わせているようにも思えます。

母の亡くなったのは暮れの十二月十九日でした。日政は母を見送つた後、次の歌を詠みました。

惜しからぬ身ぞ惜しまるる  
 たらちねの親ののこせる形見と思へば  
 「自分のこの身など惜しくもないと思つていたけれども、母が亡くなつてみると、この我が身こそが、母の残してくれた形見なのだと思えば、惜しまれてならない」。

若き日の三つの大願を果たし、孝養を尽くした日政は、まるで母を追うようにして、明るる年の寛文八年二月十八日、その生涯を終えました。辞世の歌は、次のように残されています。

鷺の山つねにすむてふ峰の月  
 かりにあらはれ飯にかくれて

鷺の山こと霊鷲山は、お釈迦様が人々の求めに応じてとこしえに法を説き続けている山のことでした。涅槃に入ることもまた飯の方便、と教えたお釈迦様に習つて、この世の生き死ににとらわれない最後の心境が、ここには表れているように思えます。

日政の墓所には、本人の遺言によつて石塔を建てず、竹三本を植えただけでした。日政の和歌の多くは『草山和歌集』という書に収められています。その一つ「たのもしな」の歌は、日政の孝養の徳を慕う気持ちとともに歌いがれ、観世音菩薩の功德を称える書に収められ、やがて梅花流に受け継がれたのです。



京都・瑞光寺

# 「梅花流全国奉詠大会に参加して」



蒼龍寺梅花講員

高橋 房子

今年も全国大会に参加してきました。秋田県は新曲の道心利行御和讃をお唱えすることとなり、私としてはすっかり覚えるにはかなりの時間がかかりました。全国大会壇上での発表は緊張そのもので、とにかく練習を重ねるよりないと思ひ必死でした。いよいよ五月三十日発表当日です。会場

に向かうバスの中で、先生のお計らいでちよつとお唱え練習をすることができました。目指す目的は車中皆同じ、気持ちが一丸となつてましたね。それが良かったと思います。他県と合同の大人数で、一度のリハーサルもなく会場におられる該当者は立行にてのご唱和です。皆心が一つに、とても丁寧にしつかりとお唱えしているのを聞きとれた時には、私、身震いする思いでした。この緊張がかえつて嬉しくなり、

一人密かに興奮して席に戻りました。梅花講に入講して十余年になります。お陰様で楽しく長年続けていられるのには訳があります。それはこの全国大会があるからです。梅花の旅となると、正直家族に気兼ねすることな

くお泊まりできるからです。今回は、東日本大震の応援という趣旨で仙台で開催されました。観光で訪れる松島・気仙沼・陸前高田と津波の脅威を再三テレビ等で認識していましたが、実際に現地を目の当たりにして、その凄まじさに息を呑むことばかりです。高台にあるホテルの二階まで押し寄せた津波跡。あの大きな船があんな場所まで押し流されてあの場所にあること。津波の高さが最大二十メートルもあつたことには改めて恐怖を感じました。



シャンティ国際ボランティア会(SVA)がアジアの子ども教育協力でご活躍されていますが、この東日本大震災時には、二〇一一年六月に岩手に事務所を開き、被災地に寄り添い地域で築いた信頼関係のもとに、今は数ヶ所に拠点を置き主に移動図書館活動をなさっているそうです。私もお仲間に入れて下さい。あの目の当たりにした光景を風化させない為にも、SVAさんにお付き合ひさせてもらい影ながら応援していきたいと思ひます。大会の度に、曹洞宗管長様にお目にかかれる幸せと、今回は佐藤宗幸様の清々しい歌声に感嘆し、また物故者三回忌法要として追善供養御和讃を現地に唱和できましたことに意義深いものを感じました。私の大好きな「まごころに生きる」の大合唱。そして福島・宮城・岩手の講員さんによりお別れに報謝御和讃を何度もお唱え頂きました事に胸が熱くなり、こちらの方からも報謝御和讃をお返したくなりいつの間にか一緒にお唱えさせてもらつてる自分がありました。

素晴らしい歌声に感嘆し、また物故者三回忌法要として追善供養御和讃を現地に唱和できましたことに意義深いものを感じました。私の大好きな「まごころに生きる」の大合唱。そして福島・宮城・岩手の講員さんによりお別れに報謝御和讃を何度もお唱え頂きました事に胸が熱くなり、こちらの方からも報謝御和讃をお返したくなりいつの間にか一緒にお唱えさせてもらつてる自分がありました。

素晴らしかった全国大会

本当に有り難うございました。

## 県北奉詠大会開催報告

～二ツ井総合体育館にて～



一昨年、昨年と続き、今年で三回目となる当地での県北奉詠大会が七月六日に開催されました。関東では熱中症を引き起こす天候も、この日は雨天となり、ほどよい涼気での大会となりました。開会式にて正法御和讃を奉詠し、追善供養御和讃にて東日本大震災および講員物故者追悼法要を行いました。

昼食後の休憩の時には、ご当地の講員さん達が矢庭に「二ツ井音頭」を踊り出し、にぎやかに楽しませてくれました。

師範詠範の登壇奉詠では恩徳寺様の持鈴に合わせて「南無大悲観世音」く観世音菩薩御和讃く慈光く浄光ととなえ、あたかも観音様を巡礼しているような暖かい雰囲気になりました。

各講の登壇も順調に進み、閉会式では新しく師範詠範の会会長になられた本間雅憲老師から厳しくも、励ましていただき「まごころに生きる」を奉詠して円成いたしました。

# 梅花流詠歌「高嶺」歌碑建立す

今年五月に宮城県で開催されました梅花流全国大会奉詠大会（当号二面に報告記事）にて、一つのビデオによる式典と報告がありました。会場では大画面で上映されましたが、音声が大会場のため少々不明瞭で聞き取れず見逃した方もいらっしゃるかと思います。大聖釈迦牟尼如来讃仰御詠歌

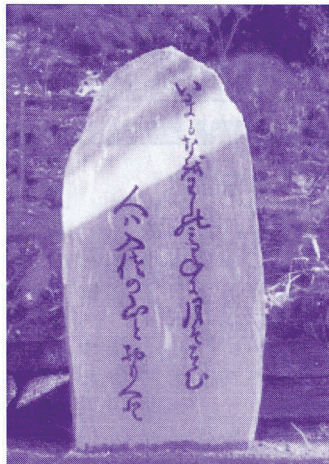
「高嶺」

今もなおお鷲の高嶺に月ぞすむ

人は入佐の山とおもえど

この歌詞の作者は、江戸中期、但馬国諸寄（現在の兵庫県美方郡新温泉町）の龍満寺十二世の玄楼奥龍禪師という名僧で、禪師が詠まれた歌集「道用桑偈」の中の「常在靈鷲山」という道歌が元になっています。

大意として「鷲の高嶺」とは、お釈迦様が説法をされたインドの靈鷲山のことで、禪師はこの「入佐の山」に限らず、お釈迦様はあらゆる場所で、今もなお「説法」を続けられている。つまり「月」はお釈迦様そのもので、今でも靈鷲山に（住み）そして（澄み）きつた月の明かり（教え）が私達をいつまでも照らし続けている。そのような意味がこの歌詞には込められています。奥龍禪師がなゼインドの靈鷲山を入佐の山にたとえたのか。入佐の山は同じ兵庫県の豊岡市出石町（日本海沿岸にある



北の美方郡から東南に五十キロ離れた）にありました。入佐山には但馬国を作った日本神話（古事記）の中の天日槍命をまつた出石神社があり、但馬国の中心でありました。いわば国誕生の尊い聖地



幕式が行われました。この宗鏡寺は臨済宗の古刹であり、別名「たくあん寺」と呼ばれるように、実はあの沢庵和尚ゆかりのお寺です。沢庵和尚といえば漬け物のたくあんを徳川三代将軍家光公に献膳提示して相談役となり、また武芸指南役の柳生宗矩に「剣禅一如」を説いて武道の極意を示した、歴史上活躍した有名な禅僧です。（宮本武蔵との交流は事実上は無く、創作とのことです）

この歌碑建立を快く受けていただいた宗鏡寺住職の小原游堂老師は「沢庵和尚も入佐山の歌をいくつも詠まれている。この入佐山が曹洞宗寺院と梅花流講員の皆様とのご縁の架け橋となつてくれるならありがたい」と申し述べられました。

除幕式では梅花流専門委員、特派師範はもとより地元の梅花講員、関係者などおよそ八十人余りが参集し、慶祝御和讃を奉詠し焼香なされました。

今後は、全国の梅花講員の皆様方にこの地に赴いていただき、玄楼奥龍禪師の詠まれた入佐の山にて「高嶺」を実感、体感し、さらに梅花に親しんでいただけることを望みます。（宗務庁記事より抜粋）

※ちなみに、出石町は現在NHK大河ドラマで放映中の「八重の桜」に出てきた川崎尚之助（新島八重の前夫、会津藩にて共に大砲隊の指揮を執り、離縁し没す）の出身地であり、墓が宗鏡寺の隣の願成寺にありました。

# テleshon梅花

ハナミ ナムナム  
011-873-7376

（毎週土曜日にテープが代わりまします）

平成二十五年

- ◆九月二十一日 法灯（高祖）
- ◆二十八日 法灯（太祖）
- ◆十月五日 達磨（和）
- ◆十二日 廓然
- ◆十九日 二祖（和）（永平）
- ◆二十六日 二祖（和）（總持）
- ◆十一月二日 永光（永平）
- ◆九日 永光（總持）
- ◆十六日 無常（和）
- ◆二十三日 月影
- ◆三十日 成道（和）
- ◆十二月七日 明星
- ◆十四日 正法（和）
- ◆二十一日 紫雲（釈迦）
- ◆二十八日 まごころに生きる

平成二十六年

- ◆一月四日 良寛さま
- ◆十一日 観音（和）
- ◆十八日 慈光
- ◆二十五日 浄光
- ◆二月一日 法灯
- ◆八日 涅槃（和）
- ◆十五日 不滅
- ◆二十二日 高嶺

※ご意見ご要望等をお気軽に  
お寄せ下さい。

〒101-0011  
秋田市金足岩瀬字前山三  
東泉寺 〇一八一八七三二二六七五

